

鈴木りえ 柿の実が色づき、秋明菊がさわさわと揺れる頃となりました。

「長信↓短信」にて、久家基美様を偲ぶる原田治子様のお文を拝読致しました。

湘南歌会を退会なさった折に、「群れることは本来好まぬ性質―云」の文章を「長信↑短信」で拝読致しましたので、私は「孤高の歌人」と想像しておりました。佐

佐木由幾先生から戴いた一枚のお葉書を、宝物となさっていらした由、私も同じでございます。平成十三年七月、編集部に差しあげた暑中見舞に、由幾先生からお返事を戴きました。このお葉書は、鎌倉彫りの文箱に大切に保存してあります。流麗な筆跡で、黒のインクの万年筆の色が、あざやかでございます。―同じ頃、朝日新聞の「ひととき」欄に久家様のお名前を見ました。日常の小さなことを書かれていらして「著述業」という肩書きでいらつしやいました。音楽を愛され、あらゆるジャンルの

本を読まれて、三十一文字に昇華なさっていらつしやいました。

お若い時から「心の花」に在籍なさり、短歌の道を一筋に歩まれた「孤高の歌人」を、私はいつまでも忘れません。天国でなつかしいお母様に音楽と短歌と百合の花を捧げ下さいませ。

花明月 父の実家は長野県佐久市

岩村田上ノ城という、かつては近くに城が見えるところにあつた。あつたという過去形は祖母が亡くなり六年前に家も壊してしまつて今はないからである。二階建ての日本家屋で、門から玄関までは葡萄の棚があり、庭には大きな柿の木が立つていた。秋になれば、それは灯るように実をたくさんつけたが、若い祖母はおそらく柿をもぐこともなく、その全部を木守柿にしていたと思う。

祖母の家を取り壊すことになつてその整理と見納めのため、上ノ城に向かったのは晩秋で、例年通り柿がたわわに実つていた。父と弟が木に登り挽ぎ、私が下で受け

取つて古新聞の上に広げていつた。

ここからが私の作業で、勇んで焼酎の瓶をもつ。祖母の家の柿は渋柿なのである。よつてこのままでは食べられない。だが、薄に焼酎を塗ると甘柿になる。せつせと焼酎を塗り段ボールに詰め東京に持ち帰つた。

幾日かしてゆつくりと甘柿になつた元渋柿。皮を剥いて割ると、種がぎつしり詰まっている。昨今は種がないものが好まれるようだが、私が好きなのは、大きな種の入つた祖母の柿。もう二度と食べられない柿だつたのだと思つたと無性に食べたくなるのである。祖母に晩年まで寄り添ひ続けた柿の木はその後、家と一緒に倒された。私の夢に出てくるだけとなつた。

時任勝正 「歌人、伊藤一彦さんは僕の先生だ。」そんな書き出し

で、俳優堺雅人の「師」と題するエッセイは始まつていた。堺雅人は言わずと知れた、今を時めく演技派俳優の一人であり、故郷宮崎

の出身である。その彼と伊藤先生との師弟関係をいいなあとぼんやりと羨ましく考えていた。その後、伊藤一彦氏がNHK短歌の選者として登場し、氏が宮崎在住一筋で、歌人としてだけでなく、その他幅広く活躍されていることを知つた。

その伊藤氏を中心に、昨年も若山牧水没後九十年トークイベントが俵万智氏、大口玲子氏豪華ゲストを迎え延岡で行われた。又、伊藤氏がその設立に大きく関わっている、葉桜短歌賞（小野葉桜を顕彰）が三十回、「心豊かにうたう全国ふれあい短歌大会」が第一回宮崎大会から数えると二十二回目を迎えている。これらを含めた、様々なイベントに常に伊藤一彦氏の姿がある。健康を気遣う周りの懸念をよそに、全国を走り回っている伊藤氏はその、容姿そのままに、まさに獅子奮迅のご活躍である。

ところで、私が、それまでの仕事に区切りをつけて、故郷宮崎で恩返し第二の人生を始めたのが